

黒澤世莉超短編集

二〇二二年七月五日初稿 黒澤世莉

もくじ

ロミオ中止

鬼退治

タイムカプセル

池袋から日暮里まで

数学者の独奏曲

カベの向こうのスズキさん

ロミオ中止

登場人物

来客

受付

劇場のロビー。来客が入ってくる。

来客

すいません。

受付

はい。(と言いながら入場)

来客

すいません。責任者の方はいらつしやいますか。

受付

すいません。まだ来ていないんですが、どういった…。

来客

責任者の方がいないんだったら、またで。いいです。

受付

そうですね。すいません。

来客

いいえ。すいません。

受付

はい。すいません。

来客

はい。すいません。

受付 …。あの。まだなにか。
来客 「ロミオとジュリエット」をやつてらっしゃるのは…。
受付 はい。当劇場でやつております。
来客 ご相談はですね。
受付 ああ、結局。
来客 お願いなんですけれども。こちらの上演を中止していただけないかと。
受付 は。
来客 やつぱり無理ですよ、責任者の方でないと。
受付 いや責任者の方でないと、つていうか。なんですか。
来客 そうですよ。あなたも思いますよね。「ロミオとジュリエット」は。
受付 すいません、まったく話が見えません。
来客 いや、いいんです。思いは一緒なんです。
受付 すいません、違うような気がします。いや違います。
来客 断言しますか。
受付 お客様のご意見はさっぱり分かりませんが、違うと思います。
来客 「ロミオとジュリエット」をなんとも思いませんか。
受付 それは、面白いと思いますよ。
来客 面白いかどうかを問題にしてないじゃないですか。
受付 話題が見えなすぎて。
来客 失礼ですけどご結婚されてないでしょう。
受付 それ関係ないでしょう。
来客 それなら仕方ない。
受付 なんなんですか。
来客 うちの中学生になる娘がいるんです。もし中学生の娘が「ロミオとジュリエット」を観て、影響されて駆け落ちされたら、あなた責任取れるんですか。
受付 あははは。
来客 なにがおかしいんですか。

受付 ご冗談ですよ。

来客 ジュリエットって一四歳ですよ。うちの娘が影響されて駆け落ちして自殺しても、あなた責任取れるんですか。

受付 わたしも中学生くらいで「ロミオとジュリエット」観ましたけど、駆け落ちも自殺もしませんでしたよ。

来客 それはあなたの場合でしょう。話にならないな。

受付 おっと。

来客 そういうわけで、わたしと学校の保護者会で署名を集めましたので。上演中止を申し入れます。

受付 子どもだからって馬鹿にし過ぎじゃないですか。さるかに合戦読んで親の敵に復讐するとか、桃太郎に影響されて鬼を皆殺しにする子どもとかいませんよ。

来客 鬼とか、いないし。

受付 たとえですよ。少数民族とかのたとえ。

来客 もっと、他人を思いやる想像力を持ったほうがいいですよ。

受付 わっしょい、きたぞ。

来客 そうやってひとを小馬鹿にした態度をとって。演劇の現場で働くんだったら、ひとを思いやる気持ちを持たないといけないでしょう。

受付 「ロミオとジュリエット」を観て、親に反対された恋のために駆け落ちする子のことを思いやれるってことですか。

来客 違います。

受付 違ったかあ。

来客 駆け落ちされたうえ、娘息子に先立たれた親御さんの気持ちを考えなさいと言ってるんです。

受付 ひよつとして、お客さまの…。

来客 うちの娘も息子も健在です。

受付 ああ、そうですか。

来客 来月三人目が生まれます。

受付 おめでとうございます。

来客 早く結婚した方がいいですよ。

受付 やかましいわ。

来客 ちよつと。

受付 すいません。つい。

来客 うちはみんな元気ですけど、もしもね、この子たちを失った親御さんが、こんなお話を見たら、どんな傷を負うのかと思うと、かわいそうで。

受付 元気になるんじゃないですか。こういう物語のおかげで、気持ちを整理できたり、痛みを和らげたりもするんじゃないですか。

来客 そういう人もいるかもしれない。そうじゃない人もいるかもしれない。そうじゃない、傷ついてしまう人たちを思いやる気持ちが必要だつてことです。

受付 四〇〇年前からこのお話が繰り返し上演されてきたのって、癒やす力が、傷つける力より強いからじゃないですか。

来客 一七世紀から二〇世紀までは最悪の戦争の世紀ですよ。そういう前世紀の野蛮な習慣から卒業した方がいい。

受付 ロミオもジュリエットも死なないで、親元に帰ってきて、両家が和解してハッピーエンド、みたいな話に書き換えたらいいんですか。

来客 …。

受付 すいません。

来客 やつと分かってくれましたね。

受付 おつと。

来客 やつぱり、話せば通じるんですね。分かり合えないことから始めて、あきらめなくてよかった。これが対話です。これが演劇です。(受付に握手を求める)

受付 ありがとうございます。

来客 あなたみたいな人がいる限り、日本は安泰ですね。

受付 …。

来客 劇場に来て、良かった。

鬼退治

登場人物

男 女

カフェ。女がいる。

男入場。

相席、よろしいですか。

：席、空いてますよ。

はい。：相席、よろしいですか。

席。空いてますよ。

はい。

他にも。たくさん。

はい。：相席、よろしいですか。

めげないね。

はい。

どうぞ。

ありがとうございます。

わたしはこれで。

待つて下さい。おかしくないですか。

失礼。

鬼ですよね。

なんですつて。

鬼、ですよね。

あなたが。

あなたが。

おわり

失礼。

落ち着いて下さい。私は内閣調査室園芸係の印南です。

大丈夫ですか。

大丈夫です。自分で言うと言説力が無いですね、その質問は良くないな。

警察を呼びますよ。

どうぞ。呼ばないでしょうけど。落ち着いて下さい。蓮田聖子さん。

鬼、てなんですか。

鬼ごつこの鬼ですよ。

…。

タッチ。(男、女にさわろうとする。女、よける)なんちゃって。

…。

私が悪いみたいになってますけど、質問が良くないんですよ。

はあ。

説明しましょうか。鬼について。鬼は、人間と同じ見た目で、人間より一〇倍優れた、種族の総称です。鬼という人種といってもいい。昔話は、人間たちから見て圧倒的に優れた鬼に対して、人間たちが抱いていた恐れが形になって残っているんですよね。こんな話楽しいですか。

楽しいですよ。

おかしくないですか。

仮にわたしが鬼だとして、園芸係って、土とかいじる園芸係ですか。

イエス。

…園芸係が鬼に何の用ですか。

園芸係ってのは二千年前からの忌み名です。内閣調査室っていうのもここ七〇年くらいの肩書でしてね。鬼退治の専門家集団です。

鬼退治ね。

男 退治っていつても、暴力ではなくて。鬼ヶ島に引っ越して
女 だいて。そこで仲間の鬼さんたちと過ごしていただいて。鬼ご
っこでもしていただいて。

女 ここでわたしが騒いだら、あなたの方が困ると思う。

男 困るのはあなたでしょう。目立つことを極端に嫌いますからね。

女 人種差別ですよね。

男 平和的に解決したいので、隔離政策になってます。

女 それが人種差別ですよね。少数派を隔離するっていう考え方が。

男 死ぬよりマシでしょう。

女 人間て怖いね。

男 そうですね。

女 わたしは鬼じゃないけど。

男 引っ張りますね。悪いようにはしませんから、任意同行にご協

力いただけますか。

女 やだ。

男 任意同行にご協力いただけますか。

女 やだ。

男 ありがとうございます。

女 あなたは嘘をついてる。ひとつ、これは園芸係の仕事じゃない。

警察にせよ軍隊にせよ、必ず二人以上で行動する。個人行動を
しているということは、公務で動いていない。

…。

女 わたしに何の用。

男 母が肝臓ガンにかかっている。現代の医学では助からない。鬼
の生キモを食べれば治る、治らない病気はないから。

女 それは、私を見逃す代わりに、肝臓をよこせてこと。

男 鬼は肝臓がなくなっても死なないだろう。

女 わたしは鬼じゃないけど、肝臓がなくなったら死ぬんじゃない。

半分くらいなら、また再生するのかもしれないけど。

男 来てもらいたい。
女 それがひとにものを頼む態度なのかな。
男 …。
女 わたしはこれで。
男 待つて下さい。お願いします。助けてください。
女 …。ねえ。
男 はい。
女 あなたは。
男 え。
女 あなたは何を差し出すの。
男 …。
女 ねえ。
男 すべて。
女 ふーん。(男に近づいて) 試してみようか。
男 何を。
女 鬼退治。

おわり

タイムカプセル

二〇一六年七月五日 第二稿 黒澤世莉

登場人物

女1 50歳前後

女2 50歳前後

舞台

現代。晩夏。深夜。学校の校庭。

本編

女1は地面を掘り返している。女2はそれを見ている。女1、手を止める。

女1 もう、止めない？

女2 くじけないで。

女1 手伝って？

女2 さっきも言ったでしょ。手伝いたいんだけど、腰をやちゃったから。わたしの話聞いている？

女1 聞いているよ。聞いているけど、これ、一人じゃ無理だよ。

女2 大丈夫。あんたなら出来る。

女1 それあんたがやりたくないだけだよ？ タイムカプセル掘ろうって、言い出したのあんただよ？ なんでわたしだけ泥だらけの汗まみれになっただの？ バカバカしい。もうやめた。

女2 まあまあ、ポール・マッカートニーの東京公演のチケットいらなの？

女1 30分で約束だったじゃん。もう2時間もやってんだよ。

女2 ジョン・レノンの東京公演のチケットもつけるから。

女1 ほんとーじゃあがんばろっかな、て嘘つけ。

女2 ジョージ・ハリスンのも。

女1 せめてリング・スターにしとけよ。なんで死んだ人ばかり。

女2 あ、死んでた？

女1 死んでるよ。マイケル・ジャクソンもプリンスも、みんな死んでる。

間。

女2 なんで人間は、死んでしまっただろうね。

女1 そんな哲学っぽい間にだまされないぞ。わたしは帰るから。あとあんた埋め戻しておきなさいよ。

女2 通報してやる。

間。

女2 学校の校庭に無断で忍び込んで、落とし穴を掘りまくるあやしい女がいるって、通報してやる。

女1 あんたがやれって言ったんじゃない。

女2 でも、わたしはやってない。なにも手を出してない。あんたが命令されてやったって言っても、誰も信じてくれないわよ。あんたは世間から後ろ指さされ仕事もやめるはめになって、わたしは発見して通報した近所のおさななじみの主婦として「いつかはやるんじゃないかと思っていました」とワイドショーでコメントするのよ。

女1 あんた本気で言ってるの。

女2 わたしは本気。30年前、あんたの好きだったよしおくんを奪うといったわたしは、どうした？

女1 奪っていった。

女2 20年前、あんたが貯金して買ったマンションに、ここわたしのうち宣言をしたわたしは、どうした？

女1 家賃も払わず3年も居座った。

女2 10年前。

女1 分かった分かった、分かりました。

女2 よし。分かったら、続けて。

女1 そんなに見たい？ タイムカプセル。自分が何入れたのかも覚えてないんだけど。何が見たいの？ あんた覚えてるの？ 中身。

女2 覚えてない。

女1 じゃあ、意味無いじゃん。

女2 覚えてないから、見たい。こんな30年後に届くハガキなんか仕込んでさ、カワイイじゃない、30年前の自分。何が入ってるかなんて覚えてないよ。自分でも何を入れたのか、何をしていたのか、何を考えてたのか、忘れてしまいうような時間でしょ。30年。気になるじゃない。カワイイ自分が何を考えていたのか。まあ、そう言ってもね。わたしは今でもカワイイけど。

女1 そのわたしはブスみたいな言い方やめてくれない。

女2 あんたの場合は時間がたってブスになったわけじゃないから。

女1 それ昔からブスだったってこと？

女2 そうは言っていないじゃない。少々顔が不自由だったことよ。

女1 あんたより勉強はできたわよ。

女2 すぐ勉強だなんだの勝負にしようとするんだから。困ったものね、顔の不自由な方は。

間。(歌1?)

女1 ちよつとまってる。

女2 見つけた？

女1 いや。

女2 じゃあ、なに？

間。

女1 地雷を、踏んだかもしれません。

間。

女2 地雷って、あの地雷？ 踏んだら爆発する地雷？ あんた地雷踏んだことあるの？

女1 昔カンボジアツアーでアンコールワットに行ったとき、「ココ昔ハ地雷原ダタカラ、キヲツケナイトシヌヨ、ハハハ」て言われた。

女2 で、地雷踏んだことあるの？

女1 「地雷雨デ流レルカラ、昨日ダイジョウブ今日ダメダタリスル」

女2 踏んだの？ 踏んでないの？

女1 踏んだらここにいないでしょ。『カチッ』イッたら、ウゴクダメ。ドカン。父サン兄サン二番目兄サン三番目兄サン地雷サヨナラシタ」

女2 ヘビーな話だな。

女1 どうしよう。

女2 そのガイドさんはなんて言ったの。

女1 動いたらダメだから、動かず助けを呼べって。

間。

女1 お願い、110番して。

女2 不法侵入で捕まっちゃうよ。

女1 死ぬよりましでしょ。

女2 落ち着いてよ。日本の、東京の、こんな平和な町の学校の校庭に、地雷が埋まつてるわけ無いでしょ。

女1 日本だってね、ついこの間までアメリカと戦争してたんだからね。

女2 どんな婆さんだあんたは。

女1 いやいや、70年前の不発弾だって、いまだに出てくるんだからね。ひよんなことから地雷が埋まつていたって驚かないよわたしは。

女2 ひよんなことってどんなひよんだよ。

女1 とにかく、警察を呼べ。呼ばないと叫ぶぞ。

女2 あ、足もと見て。ゴキブリ。

女1 ギャー！

女1、思わず飛び退く。女2、ダッシュで逃げる。

(歌2?)

何も起きない。

女2 なーんて、うそー。

間。

女2 ほら、地雷じゃなかったじゃん。何？ タイムカプセルじゃない？ わ
ーありがとー。

女1 いま逃げたでしょ。

女2 え？

女1 いま、見捨てて逃げたでしょ。

女2 逃げてないよ、びつくりしちゃって、ゴキブリ。

女1 あんたゴキブリ素手で潰して、素手でゴミ箱に捨てられるタイプでしょ。だいたい、うそなんですよ。なんで逃げるのよ。

女2 まあまあ。落ちていて。で、その足元にあるものは何かなー。タイムカプセルなんじゃないかなー。

間。女1、懐からライターを取り出す。

女1 燃やしてやる。

女2 ちょっと待ってちょっと待って。

女1 待たない。あんたがいままでわたしを待たないことがないように。15年前ハワイに行くチケットをあんたが二枚持って行って、待ってくれという私の声を聞かずに、自分が早く行きたいからって理由で空港に行き、そのままチェックインカウンターを越え、わたしを置き去りにしたように待たない。

女2 ごめんごめん、あのときはほんとごめん。オアフが私を呼んでたから。

間。

女1 あんたの思いでの詰まったこのタイムカプセル、このまま燃やされたくなかったら、私の言うこと聞いて。

女2 うん。分かった。なに？

女1 30年前、わたしの好きだったよしおくんを奪ったこと。あやまつて。

女2 あのときはごめんね。わたしも若かったから。

女1 20年前、わたしが貯金して買ったマンションに、ここわたしのうち宣言をして3年も居座った。

女2 あのとときはごめんね。ちょうどお金が無くて困ってた時期で。

女1 10年前。二人で続けてきたお笑いコンビを、結婚するからって一方的

にコンビを解消した。

間。

女2 そんな、悪い方に悪い方にモノゴト考えたらだめだよ。あんた自分が不幸になるよ。楽しいことだっていっぱいあったじゃない。わたしタイムカプセルほってるあんたみてて思い出したよ。

女1 何を。

女2 ほら、小学生の時、あんたん家がペルシャ絨毯買ったじゃない、高級なやつ。あれにカラーインクぶちまけちゃって大笑い。

女1 あんたは笑ってた。わたしは泣いてた。

女2 じゃああれだ。小学生の時、おやつにフライパンでもんじゃ作って食べたじゃない。あれなんか美味しかったじゃない。

女1 あんた食べただけでしょ。作ったのはわたし。

女2 小学生の時、二人でDJごっこしたのは？ カセットテープで架空の番組を録音して、みんなに回してた。

女1 あれは、楽しかった。

女2 ほら、楽しかったことあった。「アメリカン・パトロール」振り付けを教えてあげたこともあった。

女1 バレエ習ってたもんね。ありがとう。

女2 中学生の時、クリスマスに。パーティして、はじめてお酒飲んだじゃない。

女1 楽しかった。今思えば早すぎるデビューだった。

女2 それから成人式の時、振袖姿で集まって、写真屋さんで写真を撮ってもらった。じゃない。あの写真とかどこ行ったんだろ？

女1 まだうちにあるよ。

女2 ほんと、今度見せてよ。

女1 いいよ。

女2 あとほら、わたしが連れてくる男がいつも違ってて、一体誰と付き合ってるのか、楽しかったでしょ。

女1 正直、対応に困ったよ。めっちゃめっちゃ困った。

女2 結婚する時、衣装の試着にあんたが付き添ってくれたじゃない。アレ楽しかったでしょ。

女1 そしてあんたはコンビを解消した。

問。

女1 早く謝ってよ。

女2 やだ。

女1 謝ってよ。

女2 やだよ。だつて謝ったらあんた、もつとみじめになるよ。

問。(歌3?)

女1 あんたのせいで太ったんだ。あんたが太ったほうが面白い見た目で受けるっていうから。無理して食べて食べて食べまくったのに、たいしたインパクトの見た目にならなかったじゃないか。残されたこの脂肪をどうしてくれるんだ。

女2 もうやせていいんだよ。

女1 そんなに都合よくやせられるんだつたらなあ、世の中に結果にコミットする会社なんて生まれえないだよ。

女2 でも、そのおかげであんた、小説家になつたじゃない。

女1 そうねえ。つて、太ったの関係ないでしょ。あんたがコンビ解消したから、当時の構成作家に泣きついて、ほそぼそとライターの仕事回してもらってるだけで。ネットですぐに読まれなくなるようなまとめ記事書いて、たまに雑誌の仕事するくらいで。小説家じゃないし。

問。

女2 え、わたし知らないと思つてた？

女1 何を？

女2 あんた、小説書いてるでしょ。ペンネーム変えてさ。ていうか、私にいかにかにひどい目に合わされたかを書いて新人賞獲ってるじゃない。読んだよ。よく、思い出をネタにしてるよね。

女1 あんただってネタ出しでは、二人の思い出よく使ってたでしょ。

女2 コンビで、ね。あれはわたしたち、だった。あんたはあんただけ、でしょ。わたしに断りもなく。

女1 使わせてって言ったらあんた、使わせてくれたの。

女2 当たり前でしょ。

女1 いいや、使わせなかった。あんたそういう女だもの。表向きオツケーオツケーみたいな感じでも、わたしがあんたより偉くなるのなんか、邪魔するに決まってるもの。あんたにとってわたしは、ちよつとばかり格下で馬鹿にでき、日々のウサを晴らす標的にちよつどいい相手なんでしょ。

女2 で、そういう経験でおまんまくってるあんたは何なのよ。あんたが売ってるもんは、あんたの想像力じゃなくて、わたしの行動力でしょ。あんたの書いているものは全部、わたしがやってることだ。あなた自分一人じゃ結局何も出来ないんだから。わたしに感謝したっていいのよ。

女1 じゃああんたは、一人でなんでも出来るの？

女2、おもむろにタイムカプセルを開ける。

女2 なんだこれ、キーホルダー？

女1 お人形。そういえば、こういうの好きだった。

女2 ブロマイドねえ。恥ずかしいわやっぱ。

女2、女1にハガキ大の紙片を渡す。自分も紙片を取る。

女1 30年後のわたしへ。わたしの夢はキレイなお嫁さんになって、子どもをたくさんつくることです。

女2 30年後のわたしへ。わたしの夢は小説家になって、芥川賞を獲って、

映画にもらうことです。

間。

女1 交換する？

女2 火、貸して。

女2、紙片に火を付ける。女1、自分の紙片と一緒に燃やす。

幕

池袋から日暮里まで

二〇一〇年四月二八日 黒澤世莉

●登場人物

A 男。カメラマン見習い

B 女。大学生

C 男。チェーン店居酒屋の店長

D 女。パティシエ

●舞台

山手線の車内。午前六時。池袋から日暮里まで。

●本編

A、B、Cがいる。

A タンブラーのフタがゆるんでてき、中コーヒーだらけ。

B はは。

A 防水バッグなのに、ていうかむしろ、防水バッグだから。外に漏れないで
ビッチャビチャ。

B カメラ、大丈夫だったんですか。

A 機材は別だから。さすがに商売道具と水物はいつしよにしないよ。
B さすが。

A でも資料が全部パーでき、すげえいい匂いすんのね。
B ラッキーな感じですね。

A そうね、コーヒー好きにはたまらないね、つておい。
ビロビロになっちゃつて、ひろつたエロ本あるじゃん。

B ちよつとわかんない。

A よく落ちてるやつ。

B 見たこと無いよー。

A あそう、こんどよく見といて、橋の下とか公園の藪の中とか、あるから。でその資料持ってたら次の日ボスに殴られたし。

池袋。D、入場。

B へー、厳しいですね。

A 古い世界だからね。体罰ふつう。ライトが遅いでボカ、レフがずれたでボカ。

B 大変だー。

A まあね。

C オレ、覚えてる。

D 覚えてる。

C 久しぶり。

D うん。

A でも、好きだから。

B すごい。

A 正直へこむわ、昭和だよ、うちのスタジオん中。

B へコミはマカロン。(マカロンを取り出す)

A え。

B マカロン食べるといいですよ。(マカロンを食べだす)

D 朝は冷えるね。

C そうだね、この時間は。

A あ、くれないんだ。

B ないときは、三回叫ぶんです、マカロンって。幸せになりますよ。口にするだけで。

A マジで。

B マカロンマカロンマカロン。ほら。

D 飲みの帰り。

C まあ、そんなところ。

A マカロンマカロンマカロン。

B ね。

A いや、正直わかんねえ。

B マジで。ひくわー。

C 五年くらい。

D そんなじゃないでしょ。

A どこ住んでんの。

B 田町です。

A へえ、いいところに住んでんだ。

B ふつうですよ。実家はそのへんだから。

C 元気。

D うん。君は。

C ああ。元気。

A 逆回りの近いんじゃないの。

B ああ、まあ、そうかもですけども、おんなじくらいなんで。

A ああ。

C やっぱ飲み。

D いや、わたしはこれから。

C 夜逃げ。

D はは。

B どこなんですか。

A オレはね、田端。

B あ、じゃあもうすぐですね。

A うん。友達と二人で。

B へえ、シェアってやつだ。

A そうそう。

B はじめて会いました。やってるひと。

A あ、そう。そんな珍しいもんでもないけど。

D 撮影の、うちあげとか。

C ああ、まあ。そんなようなもん。

D へえ、がんばってんだ。

C そうね。がんばってんね。

D そっか。がんばってんだね。なんか、あれだね。

B いろいろ変な人ですねー。

A お前もな。

C どれだよ。

D ううん。嬉しいなって。

B 他人と住むのとか、大変じゃないですか。

A 全然。

B わたしムリだなー。お姉ちゃんと同じ部屋でもうムリ。

A プライベートはほしいタイプだ。

B そういうアレでもないですけど。

C いまなにしてんの。

D 電車の中では言えないようなこと。

C え、キャバとか。

B ひとりになりたいときとかどうするんですか。

A 別に、自分の部屋にいたりゃいいだけだし。

B あ、部屋分かれてるんだ。

A じゃなきやキツイかもね。

D ウソだよ。なんでそんな顔すんの。

C こういう顔なんだよ。

A ああでも、すげえ散らかすヤツだからさ、たまに切れる。

B あーじゃ私も切られますね。片付け超ムリなんで。

A いや、そうとうひどいよ、ウチのは。マジでありえない。

B どんな感じですか。

A いや、パンツとかブラとかふつうにそこらへんに落ちてるし。ヒドイのは電車の中では言えない。

B うわー、気になる。

大塚。

- D 銀座のパティスリーで働いてる。
- C え、じゃあ、すげえじゃん。菓子職人じゃん。すげえ。
- D ね。なんか、そうだった。
- C すげえなあ。
- B 彼女さんですか。
- A まさか、マジで勘弁だから。
- B へえ、そうなんだ。
- C おめでとう。
- D ありがとう。
- A ダンスやってる女の子。
- B へえ。
- A すげえ酒飲。あと片づけできない。美人だけどね。
- B へえ、会ってみたい。
- A ゴールデンウィークは実家に帰るって言った。
- D なに聞いてたの。
- C シガー・ロスの残響。
- D へえ、知らない。
- C あれ。
- A なんで。
- B なんと、なく。
- C 好きって言ってなかったっけ。
- D 言ってるない、と思うけど。
- A 音楽とか聴く。

- B まあまあ。どんなの聴くんですか。
- A 昔はビートルズばかり聞いてたけど、最近はふにやふにやしたの。
- B ふにやふにやつて。
- A 音響系とか。ビヨークとか、シガー・ロスとか。
- B ああ、いいですよねえ。
- A ね、いいよね。なごむつていうか。
- B そうですよね。
- C まだ田町に住んでんの。
- D いや、今日は違う。ていうか、
- C 夜逃げ。
- D ー、そうかな。パリに行くんだ。
- C へえ。旅行。
- D じゃなくて。
- A がんばるよ。独立するまでは。
- B マカロンつかってください。
- A うん、うん。
- B なんでそんな顔するんですか。
- A こういう顔なんだよ。
- C 仕事。
- D うん。まあ、そんなようなもん。
- C へえ、そうなんだ。おめでとう。
- D ありがとう。
- C そうか。パリか。どれくらい行くの。
- D できるだけ長く。
- C 向こうに住むんだ。
- D ー。わたしが。ねえ。

- A あーでもほんとはね、留学したい。
- B へーすごい、カッコいい。どこですか。
- A 出来ればロンドン。じゃなきゃパリかベルリン。
- B へー、パリいいですねえ。
- A 本場だもんね。お菓子づくりの。
- B そうです、食いしん坊ですから。

- C ひとりで。
- D うん。

- A じゃ、一緒に行く。
- B いやー、日本語しかできないですからねえ。
外国とか生きていけないです。
- A いや、行っちゃえば一緒だよ。一緒一緒。
- B えーマジムリです。

巢鴨。

- D まだ田端。
- C うん。
- D ユキさん元気。
- C いつの話だよ。もう三人くらい前。
- D あ、そうなんだ。
- A 海外とか、行った事ないの。
- B 家族でハワイとかはありますけど。
- A ワイハ、いいじゃん。
- B うん、楽しかったです。

- C いまはバイトの男とふたりで住んでる。
- D へえ、アシスタントやとってるんだ。
- C ああ、まあ、ね、そんなもん。

B でも住むのはまた別ですし。わたし布団が変わるとダメなんですよ。だから布団も持つてつて。

A マジで。

B ごはんも日本食で。

A え、でもスイーツ趣味なんじゃないの。

B 甘い物は別腹つすから。

A あー分かるわ。オレもそう。

B 仲間じゃないですかー。

D すごいね。ちゃんとやってるんだね。

C いや、全然だよ、オレは。

D いや、すごいよ。

A オレはメシも全部パンとかでいいから。

B あ、もう完全にムリですね。ごはんとお味噌汁がないと死にます。

A あーそりゃ海外で生きていけないわ。

B まあわたし行かないですから。

D 生きてるつてことは、すごいことだよ。

B 日本で十分。

A わー。なんか残念だわ。

D 出世したんだね。

C お前こそ出世じゃん。すげえよ。

D そんなことない。

C 向こうはなに、依頼がきたの、こっちから探したの。

D 賞をもらって。

C マジで。

D ガストロノミック・アルパジョンっていうコンクールがあつて、それでちよつと。

C マジで。

D うん。それで、オファーもらえて。

B 連休はなにしてるんですか。

A ボスがロスに行くっていうから、いちおう休み。

B 良かったですね、半年ぶりでしたっけ、

A そうそう、ほんと人使い荒いから、ギャラ安いし。

B 大変ですねえ。

A までも、好きなことだからね。がんばらないと。

D でもほんと、実力っていうか、たまたまだよ。運が

良かったし、周りの支えもあつて、わたしは全然。

C イヤミだな。

D え。

C 自信もてよ。お前の菓子、マジで美味いんだから。

D うん。

駒込。

B どんなのが好きなんですか。

A ネイキッドヤングガール。うそうそ。たぶん山かな、穂高でも行こうかな。ヌード撮りたいけどモデルいないし。いつか絶対、マリオ・テストイノみたいなポートルート撮る。うまそうで、品があつて、温度があるような。

ヴォーグの表紙撮って、グッチの広告撮って、写真集もバンバン出して。

D わたし。

C おれ。

B 打ち込めるものがあるの、いいですね。格好良い。

A だって、学校行ってるんでしょ、お菓子の。

B でも、わたし趣味ですから。

A 食べてみたいね。

B ええ、すつこいまずいですよ。

A なんてだよ。

B 分かんないですけど、期待されても。

C おれ、カメラやめたんだ。

B あ、じゃあ、わたしのお菓子撮ってくださいよ。うまそうで、品があって、温度があるような。

C いまは居酒屋の店長。

A いいよ。いまブツどりばかりやってるから、もとの一〇倍うまそうに撮ってやる。

B うわー、そうなんだ。

D そうなんだ。

A もうすぐつくね。

C 仕事帰り。毎日この時間、この電車乗ってる。

B うん。

D そっか。

A うち、くる。

B (うなづく)

C ごめん。

田端。

D 降りないの。

A 降りないの。

A、B、退場。

C 送ってくよ。

D ありがとう。

D 聞いている。

C いま一緒に住んでるの、バイトのワンくん。中国人。いいやつだよ。

D なんでやめちゃったの。

C なんてかね。

C 分からない。

D 好きだったよ。君の写真。実物より美味しそうになるの、すごかった。

C 撮りたいようなもんは撮れなかった。

D まだ、早いよ。

C そうかもだけど。普通に、食べないし。

D やめたわけじゃないんですよ。

C 機材は全部売った。やりたいこと、やれてんの。

D わたしには、つくりたいものなんて、なくて。

ただ毎日こねたり焼いたりしてるだけで。

君みたいな目標とか、全然なくって。

C 打ち込めるものがあるの、いいね。格好良い。

D そんなことないよ。目標に向かって突っ走ったっていう

より、全力で現実から逃げまくってたら、パリ行のチケ

ットを持ってたって感じ。

C なんで続けてるの。

D なんてかね。

C 分からない。よな。

西日暮里。

C 分からないから、続くのかもな。

D うん。

C 行つていい。

D ごめん。

C ひとりじゃないんだ。

D ごめんね。

C ウソつきだね。

D お互いにね。

C じゃあ、お元気で。

D うん。元気でね。

日暮里。D、マカロンを取り出し、渡す。D、退場。

C マカロンマカロンマカロン。

おわり

数学者の独奏曲

第三稿 20090310

光。

光。

光。

寒さと痛み。大声で泣く。暖かく柔らかなガーゼに包まれる。大きな腕に抱かれる。

997日後、彼、と出会う。

私と彼は同年同日同時に生まれ、彼の死の同年翌日に私は死ぬ。

薄暗い天井、傾きかけた太陽、氷の溶けた麦茶のコップ、

赤、青、黄、緑、積み木をねぶり、積み上げ、壊しながら、

数、

を覚える。

積み木は37こあり、車にも船にも飛行機にもなるが、おもちゃ箱にしまえばゼロになる、ということに生後1001日目に気づき、たたみの目を数えながら7日を過ぎす。

うたた寝をする女に、私は朗読をせがむ。数に遅れて317日後、言葉、を覚える。

彼は本を読むより外で走り回る時間が長い。私は外で走るより寝込んでいる時間が長い。

どくだみ、ひまわり、コオロギ、アブラゼミ。泥のついた半ズボン、鼻水のついたシャツ。たたきにバラバラのくつ、積み上がった絵本の山。私が読んで聞かせると、彼はつきつきに覚える。本の山は増え、増える速度を超えて覚えていく。そのまま大人の本棚に手を伸ばす、まわりの子供達は誰も読めない本を私たちは次々に読破する。

桜、は、ほぼ花を散らせる、葉が目立つ。

だぶだぶの制服。ぴかぴかの革靴。

学校に通う。授業の内容は全て知っている、自分たちで新しい主題を見つけ、研究する。

彼は野球部に入り、学級委員に立候補し、つねに人の輪の中心にいる。

私は帰宅部になり、図書委員にされ、ひとり本の山に囲まれている。

彼の誕生日には大勢の級友が押しかけて大合唱をして、私はそれを眺めながらケーキをほおぼる。

彼の下駄箱にはなにかしらの手紙が届き、私の下駄箱には私の靴のみが入っている。

彼は164センチ、私は146センチ、体重は同じく51キロ。

試験の結果は彼が2番、私は1番。

私が最も長い時間を共に過ごした相手は彼で、

彼が最も長い時間を共に過ごした相手は私で、はない。

雨。イチヨウ。雪。桜。

雨。イチヨウ。雪。桜。

彼女、と、出会う。

身長152センチ体重推定49キロ黒いローファー白い靴下ひざ下のセンチまでスカート膝だけ紺色上着も紺色白いブラウスはワンサイズ大きいからボタンを

トップまで止めていても首元がゆるい、肩まである三つ編みを二本、桜色のほお。

私と彼は始業のベルが鳴るまでの308秒その場に立ちつくし、ベルの音を聞いてそれぞれの教室に駆け出す、彼女はどちらの教室にもいない。

●○彼は制服の胸のあたりがきつく、私は腹のあたりがきつい。

すきま風が大手を振って渡っていく8畳間、深緑のペンキがところどころはげ赤茶けたところが見える鉄製の二段ベッド、がふたつと、白か薄黄色に塗られた木製の机が四人分、ほつれが目立ちくずが足にまとわりつき時に刺さる畳と、半径25センチ前後のシミが4つ窓際に固まっている天井、論文参考書ドイツ語フランス語英語辞書辞書辞書。私が彼との年間過ごした寮。一人で借家を借りてからは、ベッドと机が一人分になる、22年間で1回引越すが、本とノートは増えつづけ机と椅子とベッドは一度も買い換えない。●○

雨。イチョウ。雪。桜。

蛍光灯の光、リノリウムの反射、埃のにおい、影、準備室のドアの影で、私は彼女とはじめて二人きりになる。うわばきのかかたとを踏んだ一年生が駆け足で通り過ぎる、息がつまる、息がつまる、呼吸の仕方が分からない。目当ての図表をみつめて、みつからないようなふりをして28秒、汗が伝う額をぬぐう。彼女はシャツの袖をゆらしながら、そろえた襟足から首筋をちらつかせて、二歩前を歩いている。教室まで、164歩、彼女の斜め後ろを歩く。

私と彼の共同の論文がはじめて世間に出る。●○149ページから157ページに掲載される。彼女はおでこにしわを寄せながら32秒読み、36秒で斜め読み、桜色のほおをバラ色に染めている。この国の数学教授の66パーセントが理解できないこの論文を読んだ彼女は、翌日クッキーをつくり私と彼に渡す。●○

雨。イチョウ。雪。桜。

32,455 人が見守るマウンドで、しまやき、足首、ひび、こし、せなか、かた、

ひじ、うで、てくび、ゆび、と力を回転、移動させながら、18.44メートル先のミットめがけて彼は、時速146.7キロのボールを投げる。汗、チューリップハット、六甲おろし、ぶつかき、汗、ブラスバンド、汗、応援、敗北、泪、泪、汗、笑顔、汗。を病院のテレビから眺める私。

彼女が好きだ、と彼は私に言い、私は心臓が止まる音を聞きながら、ほおの筋肉を上へ上へと持ち上げて、協力を約束する。そのまま二駅離れた彼女の家にいき、彼が好きであることと私が好きであることを同時に伝える。彼女はありがとうとはつきり言つて、ほおをバラ色に染め、右目から0.5グラムの涙的を確認する。私は体中の筋肉をこわばらせながら、ぐるぐるとまわる視野で124分かけて家まで歩き、239時間51分19秒眠らずに過す。

彼は \blacktriangle 球団からのドラフト一位指名をことわり、私と同じ研究室に進む。同じテーマに取り組み、フランス、ドイツに渡り、学会でいくつかの発表を重ねる。

彼は彼女と結婚し、大学をやめ、企業に就職する。わたしは独身でいる。彼の子供は上から男、女、女、男、住まいは私鉄の駅から徒歩17分の2DKから、通勤時間を片道47分短縮する4LDKオートロック床暖房に引っ越し、終の棲家となる高台の一戸建てを25年ローンで手に入れる。

彼は彼の能力の ∞ 割を社内での調整に振り分け、残りの ∞ 割の研究での度の社長賞を受賞する。

私は50人の学生を教えそのうち ∞ 割に単位を与える、10年間繰り返す。

坂を ∞ 分歩くと、道ばたにタンポポ、すずらん、ジンチョウゲ、キンモクセイはさかりでにおっている。振り返ると駅と駅前の商店街は、夕飯の買い物をはじめ主婦たちの自転車16台が走行中、389台が駐輪中。緑側に通されると、

風いでいる海がこがねいろにたゆたうのを、27分見つめる。

挨拶もせず立ち上がり玄関からくつを履きながらかかとをふみながら、商店街

を43メートル歩いた文房具屋でコクヨの青いB5ノートと黒インク透明ボールペンをもらい千円払ってお釣りを受け取らず、各駅停車が往復する間書き続け、乗り換え、反対方向であることに30分後に気付き、また各駅停車にて自分の研究室についたときには、私の人生のなかで最も重要な論文の骨子はすっかり出来上がる。

畳に寝ころび、全身の筋肉が弛緩する、よだれが口角からほおを伝って畳に染みていく、毛穴全てからだいたいいろいろの酸素がはいり毛細血管から心臓にいたりへモグロビンが体中に熱を運んでいく、手足を伸ばすとカップラーメンのゴミを蹴り倒し飲みかけのお茶をこぼし大の字になり、体重が軽くなりヘリウム程度の密度になり天井が近づいてくる、と屋根をすり抜けて夜空の頂点にぐんぐんと近づきこがねいろに煌々と輝く十六夜に照らされながらくると下を向いてみると藍色の20年物の屋根瓦の我が家より380,000キロ中空にいながら欠けた瓦から一番高い山から一番深い海溝まで東半球に存在する全てが分かる。

光。
光。
光。

世界で一番知名度のある数学賞の42番目の受賞者になり、この国で一番偉い人から408番目の勲章をもらう。入道雲が空の三分の一を覆い、待ち行く人の91パーセントが半袖を着る日に、背広を着込んで鳥肌を立て3時間過ごし、咳き込みながら37回形式的な挨拶を交わし、そのうち98パーセントが初対面。外国の研究室からの招待もそれ以前の11倍に増え、大学経由での講演依頼は80倍になり、それも5年もすれば元通り落ち着く。
また私の人生の91パーセントをしめるひとりの時間が帰ってくる。

彼は心拍数を弱め、呼吸を減らしながら、青白い顔で

「悪くない人生だ」

と言う。

私はとくに顔の筋肉を動かさず、心拍数も変わらず、呼吸も通常どおり
している。

彼の呼吸が止まる。

彼の通夜には928人の弔問客がおとずれ、そのうち社内の人間を引くと8人。
子供と孫はフランス、アメリカ、インド、ブラジルにいるために来られない、
黒い波が坂を寄せては返していく。

彼女はほおをバラ色に染め私に耳打ちする。私は顔の筋肉、心拍数、呼吸を平
常の倍ほど運動させ、挨拶もせず立ち上がり玄関からくつを履きながらかかと
をふみながら、商店街を「メートル歩いた踏切に入り込み、カンカンと耳元
でなく踏切と33人の踏切を囲む人たちの100デジベルの声を聞きながら、時
速62.9キロの特急電車を2.5ミリ鼻先にむかえて、黒いネクタイ、黒い上着
を圧倒する風圧の中でつぶやく。

「悪くない人生だ」

光。

光。

光。

筆者註：●から○で囲まれた部分はカットしても良し。全部上演すると15
分、カットすると12分くらいが目安。

カベの向こうのスズキさん

ヨシムラとスズキがいる。二人の間は壁で隔てられている。

ヨシムラ スズキさん、スズキさん、いますか。

スズキ いますよ。スズキじゃないですけど。

ヨシムラ じゃ教えてくださいよ。

スズキ まずいでしょ、さすがに。

ヨシムラ スズキさん。寒くなってきましたね。

スズキ それで。

ヨシムラ 冷たいですね。

スズキ 冬はね、寒いよ。

ヨシムラ 結婚するんです。

スズキ お、おめでとう。

ヨシムラ 明日。

スズキ いきなりだね、また。

ヨシムラ 秘密にしてみました。

スズキ わりと、シヨックだなー、え、どれくらいつきあってる？

ヨシムラ 二年。

スズキ 女は怖いなー。

ヨシムラ スズキさん女です。

スズキ 客観的な話。

ヨシムラ で、話すと長くなるんですけど、別の人と駆け落ちしようと思うんです。

スズキ しれつと言うね、キミは。

ヨシムラ 理由聞いてください。

スズキ はいはい。理由は。

ヨシムラ 彼は、結婚する方の彼のことなんですけど、だから仮にオットオとしますけど、オットオはわりと背も高いしななというか、やさしいかんじではあるんですが、給料もなかなかすごくてですね、あの、コンサルティング会社っていうんですか？ 何やってるのかよくわからないんですけど。女がいるんです。

スズキ うん。困るね。

ヨシムラ 困りますよ。

スズキ え、キミは二股してなかったの？

ヨシムラ しませんよそんなの。オットオにへんなのがいるんで、あ、それはなんで知ったのかつていうと、尾行ですこう、サングラスとかコートとか着て。スズキ そんなわかりやすいんだ。

ヨシムラ なんでも形から入った方がいって言います。

スズキ それで、見ちゃったわけだ、現場を。

ヨシムラ いえ、ばれました。

スズキ ばれるよね。

ヨシムラ なんで知ってるんですか。

スズキ いや、ばれそうだなーと思うよ。普通たぶん。

ヨシムラ 私的には完璧以上変装してたんですけどね。で、彼の会社六本木なんで、ロブションでごはん食べて帰ってきました。ふだん行列なんですけど、なんかその日はたまたま入れて。ラッキーでした。

スズキ 女の陰はどこにあったの。

ヨシムラ そう聞いてくださいよ、それがぜんぜんないんですよ。

スズキ えー。

ヨシムラ 絶対女がいるのに、そのヒントも出さないんですよ。

スズキ そりゃヒントは出さないよね、わざわざ、むこうからは。

ヨシムラ だから、私も相手を見つけてかけおちしてやらないとなーって。

スズキ え、相手いないの、キミ。

ヨシムラ いませんよ、言ったじゃないですか。

スズキ そもそも、彼は浮気してないんじゃないの。

ヨシムラ それは 아닙니다よ。だって、わたしべつに可愛くないし頭も悪いし、なんていうか、釣り合わないじゃないですか、彼と。彼はすごい完璧超えちゃってる超人だし、顔もいいし、頭もいいし、顔もいいし、とにかくもったいなんですよ。

スズキ キミのそういうところ好きなんだよ。

スズキ、壁を回り込んでヨシムラの前に立つ。

スズキ 私はね、もう、いないひとだから。一人で考えなさい。じゃあね。

スズキ、歩いて去る。

ヨシムラ また来てもいいですか。

おわり

終わり

上演にあたって

上演許可は左記までお問い合わせ下さい。

合同会社 Level 19

電子メール

info@level19.net

発行元

黒澤世莉 二〇二二年七月五日